

摂河水損村々改正図

淀川水系で近世・近代に発生した最大規模の洪水ははん濫災害を示す絵図である。この災害は、1802年（享和2年）7月2日から3日まで5日間続いた。この絵図には、淀川中・下流域の河川堤防の決壊か所が赤色で描かれているが、どの地域まで浸水が及んだのか、その被害の大きさについては、同図に書かれた簡単な解説文に加えて他の資料からの推定作業が必要である。結論から先に示そう。

この時の洪水流量は、京都府加茂地点でのはん濫実績から、毎秒2.2万 m^3 と推定され（国土交通省）、現在の基本高水ピーク流量の1.7万 m^3 を凌駕している。現行の超過確率計算結果から推定すると、再現期間が約400年の巨大洪水だった。

水没したのは、左岸の東大阪地域のかつて玉造江（たまつくりえ）、河内池や深野池（ふこのいけ）、新開池（しんがいけ）と呼ばれていた低湿地・沼沢地である。現在の近畿日本鉄道奈良線以北で淀川との間に立地する守口、門真、寝屋川、枚方の各市、生駒山麓の大東、八尾、東大阪の各市と右岸の島本町、高槻市に広がる。なお、大阪市内でも浸水被害が出ており、臨海地帯の此花区の（旧）六軒屋新田、旧中津川（現在の淀川）に沿った西区九条、西淀川区野里、福島区海老江である。そして北区堂島、中之島付近は深さが7mも水没した。

つぎに、それらの根拠を示してみよう。この絵図の中に、「風雨烈しく……」とあり、風も強かったという記述がみられ、かつ数日以上にわたって豪雨があったことから、台風と梅雨前線の組み合わせであったと推定される。ただし、大阪湾では高潮被害が発生していないこと（日本高潮史料）から、雨台風であったようである。

淀川水系は3つの流域から構成されている。琵琶湖・宇治川流域と木津川流域では豪雨があったが、京都では水害が発生していないので桂川流域では豪雨はなかったと判断される。洪水当時、滝澤馬琴が東海道の三重県鈴鹿市から滋賀県草津市へ旅行中にこの水害に遭遇しており、「霧旅慢録

（きりよまんろく）」と題する紀行文が残っている。それによれば、琵琶湖に流入する野洲川が大雨ではん濫し、当地で6日間も釘づけになっている。

木津川上・中流でもはん濫災害が起こっている（木津川・宇治川低地の地形と過去400年間の水害史：京都歴史災害研究第7号、200年）。瀬田川と木津川にはそれぞれ狭窄部が存在し、そこで流量がコントロールされている。このことと、上流で降った豪雨は数日に及んだこともあって、これらの支流が合流する枚方から下流では、長期間にわたって洪水はん濫が継続したと推定される。

被害の大きさは、「享和二年淀川洪水図」や「鴻池新田会所」の文書からも推察される。鴻池家の収入は新田（200ha）における河内木綿や稲作の小作料、年貢、現物によってもたらされ、1716年の収入額の6.8億円（現在の貨幣換算）に対し、大洪水があった1802年にはわずかに2,600万円に過ぎない凶作であったことから、水害のひどさが推測される。享和のはん濫の規模が1885年（明治18年）の洪水規模を上回っていた証拠は、淀川左岸の文禄堤（豊臣秀吉の普請）の決壊か所や決壊延長（享和の19か所、約2.9km）に対し、明治のそれらはそれぞれ1か所、約150mであり、いずれも前者が圧倒しているからである。

大阪市内の被害であるが、「榎並八箇洪水記」によれば現在の城東区の野江水神社（すいじんじや）は被災しておらず、それ以外の現在の大川（旧淀川）と寝屋川の合流点より北東側の市街地は浸水したことがこの絵図からわかる。大阪市内の中心部に当たる船場・島之内地区は浸水しておらず、これは、淀川下流の毛馬から曽根崎新地を結ぶラインより北側はもともと湿地帯であったから、ここが遊水地の役割を果たしたのであろう。JR大阪駅は1889年にこの湿地帯の真ただ中に作られており、当時「埋田」と呼ばれていた地域が現在の「梅田」である。

河田 恵昭（関西大学 社会安全学部長／教授）

攝河水損村改正圖

